

## 【内灘町】

### 1人1台端末利活用に係る計画

#### 1. 1人1台端末をはじめとするICT環境によって実現を目指す学びの姿

一人一人の児童（生徒）が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることを目指す。

そのためには、1人1台端末をはじめとするICT環境をも活用しながら、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」によって、全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するとともに、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」にも取り組み、これらを両輪として「個別最適な学び」の実現を目指す。

また、ICT環境を活用することで、児童生徒一人一人が自分のペースを大事にしながら共同で作成・編集等を行う活動や、多様な意見を共有しつつ合意形成を図る活動など、「協働的な学び」を充実させる。ICTを利用して空間的・時間的制約を緩和することによって、遠隔地の専門家とつないだ授業や他の学校・地域や海外との交流なども積極的に取り入れ、より幅広い「協働的な学び」をも目指す。

#### 2. GIGA 第1期の総括

令和2年11月、1人1台端末と高速通信ネットワークの整備を完了している。同時に授業支援アプリを導入して、児童生徒一人一人が自分の考えを表出し、互いの考えを共有できる環境を整えた。また、ドリル教材アプリも併用して、児童生徒一人一人が自分のペースを大事にしながら基礎的・基本的な知識・技能を習得できるようにもしている。令和3年度からGIGAスクール構想推進のための専属の職員を置き、各種アプリの使い方から授業への活かし方など幅広く指導・助言および支援を行ってきた。

GIGA以前の授業では1単位時間の中で意見を発表できる人数には限界があったのに対して、全員が同時に意見を書き込み、それと同時に他者の意見を閲覧することができる授業支援アプリによって「協働的な学び」のあり様は一変したといえる。教師もその効果を実感し、積極的に活用するようになってきた。また、特定のアプリに拘らず、学習内容や学習の進め方に適したアプリを選んで活用する実践も増えてきている。

このような活用は、学級の中で一斉に行われるものであって、児童生徒が自ら選択しての「文房具的な活用」には当たらない。「文房具的な活用」を進めていくためには、まず「活用する・しない」の選択を子供に委ねる必要がある。その上で、子供は必要に応じてICTを活用し、あるいは他のメディアを活用して「個別最適な学び」を実現することになる。

子供が自ら選択してICTを活用する場面としては、情報収集する場面と思いや考えを表現する場面、そして知識や思考を共有し協働して課題解決に向かう場面が考えられる。それぞれの場面でICTが選択肢となるためには、「どんなツールをどのように使うとどんな学びができるのか」を知っていることが前提となる。したがって、小中学校では様々なアプリを授業の中で使わせ、多様な学び方を体験させていくことが重要である。

これまでは、教師が指示して一斉に1人1台端末を使わせるが、「先生の指示がなければ1人1台端末を使ってはいけない」というルールが、明示的か否かにかかわらず存在していた。「子供に委ねる」ということは、このルールを打ち破り、「必要と感じたらいつでも使ってよい」というルールに変えていく

ことである。すると、子供の中には学びから逸脱する者が出てくる。そうした懸念から「子供に委ねる」ことへ踏み出せていないのが現状である。しかし、これは「いかに子供を学びに向かわせるか」という学習指導の根源的な問題であって、ICT 活用に限った問題ではない。敢えて ICT 活用に論点を絞るならば、その使い方を自律的に判断できるようにするという「デジタルシチズンシップ教育」へと歩を進めなければならない。

中学校では 1 人 1 台端末の持ち帰りを基本とし、家庭学習での活用を推奨しているが、小学校では長期休業の期間を除けば、やはり教師の指示によってのみ持ち帰りをさせている実態がある。毎日の登下校で携行するには重さの問題もさることながら、登下校中の破損や家に置き忘れて授業で使えないことなどに対する懸念によるところも大きい。しかし、持ち帰りを奨励しても家庭学習での活用が伴わなければ本末転倒であり、無意味に運搬の負担を増やすだけになりかねない。ここでも授業での活用と同じく「必要と感じたらいつでも持ち帰ってよい」というスタンスに切り替えていくことが望ましい。

中学校では、教室に入れたい生徒に向けて授業をオンライン配信し、教室外からも授業に参加できるようにしている。また、アンケートアプリを活用して毎日の健康観察を実施しており、生徒の希望に応じて直ちに教育相談を実施できる態勢を整えている。小学校では、教師と児童、教師と保護者の face to face のコミュニケーションのほうを受け入れられやすく、1 人 1 台端末の活用には至っていない。

### 3. 1 人 1 台端末の利活用方策

児童生徒向けの 1 人 1 台端末環境を引き続き維持し、以下に挙げる利活用を推進する。

#### (1) 1 人 1 台端末の積極的活用

情報収集の活動で、インターネット検索の経験を十分に積ませ、情報の真偽を見分ける力を高める。

表現する場で、プレゼンテーションやワープロを使わせ、表現力を高めるとともに、それらのツールを使うことのよさを感じさせる。

これらのツールは、児童生徒へ指導するばかりでなく、教師自身が積極的に活用し、活用している姿を児童生徒に見せることで、児童生徒は学びに有用であると感じ取り、自らの学びにも積極的に活用しようとする態度が養われる。

以上を踏まえて、「必要と感じたらいつでも使ってよい」ことを、教師と児童生徒の共通認識とする。また、家庭学習においても「必要と感じたらいつでも端末を持ち帰ってよい」ことを共通認識とする。

#### (2) 個別最適・協働的な学びの充実

授業支援アプリの活用をさらに推し進め「協働的な学び」を充実させていく。また、授業支援アプリを活用した「指導の個別化」も充実させていく。

チャット・掲示板・オンライン会議などの情報通信ツールを活用して「協働的な学び」を一層発展させる。同時に、それらの使い方の良し悪しについて考えさせ、自律的な判断力を養っていく。

「必要と感じたらいつでも使ってよい」ことを基本とすることで、「個別最適な学び」を充実させていく。

#### (3) 学びの保障

小学校の不登校児童への支援、教育相談の態勢については face to face のコミュニケーションが重視されているが、児童の状況によって必要が生ずれば、中学校での実践を参考に 1 人 1 台端末を活用できるように準備しておく。